

「強者のみにあてがわれる深き苦悩」 —フィッツジェラルド作品における 三人の嘘吐きとその嘘を巡って—

“The Deep Pain That Is Reserved for the Strong”—Three Liars in F. Scott Fitzgerald’s Works and the True Meaning of Their Lies—

山路 雅也
Masaya Yamaji

序

周知の通り「冬の夢」(“Winter Dreams” 1922)と『偉大なるギャツビー』(*The Great Gatsby* 1925)には、ジュディ・ジョーンズ (Judy Jones) とデージー・ブキャナン (Daisy Buchanan) という「黄金の妖婦」(Kuel 64)然と描かれるヒロインが登場する。彼女たちは富裕と言う眩い金色の衣を纏い主人公を魅了して止まない。「冬の夢」においてはジュディが、「頭髪を束ねたヘアバンドには金色が施され、ドレスの裾から覗く靴の爪先も金色に光らせた金糸の衣装を纏った細身のエナメル人形」(“Winter” 140)の様な出で立ちで主人公デクスター・グリーン (Dexter Green) の前に姿を現し、『ギャツビー』においてはデージーが、「高き宮殿におわす王女、黄金色の娘」よろしく登場すると、主人公ジェイ・ギャツビー (Jay Gatsby) の耳で「金に満ち溢れた」声を密やかに響かせている (*Gatsby* 94)。

しかし、こうした「黄金の妖婦」の素顔はいずれもお世辞にも褒められたものではない。幼少期のジュディは世話役の女性に「くだらない婆め」(“Winter” 129)と毒づき、成長を遂げた後もデクスターを含め数多の求愛者たちに対して、気紛れに「興味を示したり励ましの言葉を与えたかと思えば、悪意や無関心を示して軽蔑を浴びせ」た挙句、「耐え難いほどの精神的苦痛」(“Winter” 138)を味わわせている。一方デージーはトム・ブキャナン (Tom Buchanan) という夫がありながらギャツビーと不倫関係に陥ったばかりか優柔不断な態度を取り続け、最終的には自らの轢き逃げの罪をギャツビーに負わせ彼を死へと追いやってしまう。そんな彼女だ

からこそ、作品の語り手であるニック・キャラウェイ (Nick Carraway) にその本質を「不注意」(*Gatsby* 139) で「腐り切っ」(*Gatsby* 120) していると喝破されても致し方あるまい。

この様な素顔を持つヒロインに主人公たちが想いを寄せ続けることを奇異に思う読者は少なくなかろう。その熱い想いを無慈悲にも面白半分に弄ぶばかりのジュディを、それと知りながらひたすら恋慕し続けるデクスターに共感を覚える読者が果たしてどれ位いるだろうか。「物や人を滅茶滅茶にしておきながら自分たちの金やらどうしようもない程の無頓着ぶりに退散し…自らが生み出した窮状の後始末を他の者にさせる」(*Gatsby* 139) デイジーを、その命と引き換えに庇い続けたギャツビーにしても同様であろう。デクスターとギャツビーが共に狂おしいまでに恋焦がれたものがこうした不誠実極まりないヒロインたちであったと考えるのは少々無理があると言わざるを得ない。彼らが追い求めていたものは、そうした生身のヒロインではなく、その脳裡に生成した彼女たちの虚像だったのではあるまいか。ヒロインの実像が不誠実極まりなく醜悪なものであったからこそ、彼らはそれを己が理想に見合うものとすべく美しく飾り立てていたのではあるまいか。そう推理するならば、デクスターとギャツビーは共に、実像とは大きく異なるヒロインの虚像を生成していたわけであり、それは詰まるところ嘘吐きの主人公がヒロインに纏わる嘘を吐いていたということになる。

F・スコット・フィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald) の作品に登場する嘘吐きの主人公はこの二人にとどまらない。その愛読者ならば嘘吐きと言えば「罪の赦し」(“Absolution” 1924) のルドルフ・ミラー (Rudolph Miller) を真っ先に思い起こすであろう。ジョン・クエル (John Kuehl) もまた「冬の夢」と「罪の赦し」を「『ギャツビー』作品群」(Kuehl 64) の構成作品と見做すが、後者が主人公の吐いた嘘の是非を巡る作品であることは周知の通りだ。ここにデクスターからルドルフを経てギャツビーへと連なる嘘吐きの系譜が成立することになる。

本論ではこの系譜に名を連ねる三人の嘘吐きの嘘を彼ら自身と先述の二人のヒロインの消息と合わせて考察し、その嘘の真意の解明を目指したい。

I

「冬の夢」ではジュディの虚像の生成に一心に務めてきたデクスターではあるが、さすがの彼も彼女に翻弄され続けるうちにいつしか深い徒労感を覚えるようになる。クリーニング業で名を成し社会的な成功を収めた彼ではあるが、「ジュディを自分のものにするなどできはしない」(“Winter” 138-139)との思いは日増しに募り、やがてそれは如何ともし難いものとなってしまふ。そして彼はジュディに寄せる恋慕も含め、一切合切を放棄してしまうことになる。

He went to East in February with the intention of selling out his laundries and settling in New York—but the war came to America in March and changed his plans. He returned to the West, handed over the management of the business to his partner, and went into the first officers’ training-camp in late April. He was one of those young thousands who greeted the war with a certain amount of relief, welcoming the liberation from webs of tangled emotion. (“Winter” 143)

大戦と言う歴史の大きなうねりに身を投じることで、ようやくデクスターは、彼女との「ほつれた感情の蜘蛛の巣から解放」され、「何がしかの救われた感情」を手にすることが叶ったと言えよう。こうして彼は大戦を契機にジュディとの関係を解消し、彼女を巡る嘘を吐くことに終止符を打つのである。

一方『ギャツビー』の主人公はそんなデクスターとは対照的だ。彼はデイジーの醜悪な実像を承知の上で、その虚像の生成に終始励み続ける。ニックは、五年ぶりに振りにデイジーと再会を果たした際のギャツビーの胸中奥深くへと分け入ってみせる。

Almost five years! There must have been moments even that afternoon when Daisy tumbled short of his dreams—not through her own fault but because of the colossal vitality of his illusion. It had gone beyond her, beyond everything. He had thrown himself into it with a creative passion, adding to it all the time, decking it out with every

bright feather that drifted his way. No amount of fire or freshness can challenge what a man will store up in his ghostly heart. (*Gatsby* 75)

引用の「幻影」とはギャツビーが生成するデイジーの虚像に他ならない。共に愛を育ててきた筈の彼女が、自分が戦地に赴いている間に大富豪のトムに許へ走ろうとも、ギャツビーはそうした現実をさておき、その虚像の生成に「没入し、始終それを増大せしめ、手元に吹き寄せる鮮やかな羽毛を用いてそれを美しく飾り立て」続けた。換言すれば「創造的情熱」をもって不実なヒロインを巡り嘘を吐き続けた。その「創造的情熱」が如何程のものであったのかは、次のギャツビーの発言を見れば明らかだ。

“I don’t think she [Daisy] ever loved him [Tom].... Of course she might loved him, just for a minute, when they were first married—and loved me more even then.... In any case...it was just personal.” (*Gatsby* 118-119)

引用はギャツビーとトムがデイジーを巡り攻防を繰り返した後、ギャツビーがふと漏らす言葉だ。デイジーがトムをつれなくも選んでしまうことでこの攻防は呆気なく幕を下ろすわけだが、そうした状況に置かれてもなお、彼は臆することなく引用の言葉を吐くのである。デイジーによる裏切りと言う過酷な現実を突きつけられようとも、「いずれにせよ、そんなことは個人的なことに過ぎない」と彼が口走るに及び、ヒロインを巡り嘘を吐き続けることへの異様とも思える彼の執着振りが一層際立つことになる。

この様にデクスターが嘘を吐くことを放棄してしまうのに対し、ギャツビーはそれに固執し続けるわけだが、ここで留意すべきは主人公たちが嘘を吐き続けるか否かにより、彼ら自身とヒロインたちの消息もまた大きく変わることだ。

嘘を吐くことを放棄したデクスターはその後ニューヨークの摩天楼群の一角にオフィスを構え、もはや「高すぎると思われる障害は存在しない程の成功を収め」(“Winter” 143) ることになる。ジュディとの関係を解消してもなお、その後デクスターが永続的な苦悩に耐え忍ばねばならぬことは後述する。だが、たとえ上辺だけであろうと、彼が安逸な生活を手に入れたことは確かなのだ。それに対し嘘を吐き続けたギャツビーの消息は余

りに対照的だ。彼はデイジーの轢き逃げの濡れ衣を着せられた上、復讐の念に駆られ「人の形をした灰色の妖怪」と化した被害者の夫ジョージ・ウイルソン (George Wilson) の放った凶弾に撃ち抜かれると、屍を「ゾツとするような葉叢越しに覗く見慣れぬ空の下」(Gatsby 126) に晒さねばならない。

二人のヒロインの消息も主人公たちのそれ同様鮮やかな対照をなしている。クエルはジュディとデイジーを比較しそれぞれの配偶者との関係から次の様に述べている。

They marry similar men. Anticipating Tom Buchanan, Lud Simms “has gone pieces”; “he drinks and runs around.” Buchanan may be more bigoted and brutal, yet Simms too “treats [his wife] like the devil. Ironically, Judy no less than Daisy, loves and forgives her reprobate husband, though only Judy becomes domestic and faded in the process. (Kuehl 64-65)

引用のラッド・シムズ (Lud Simms) とは、ジュディと別離して七年後にデクスターが初めて耳にする彼女の夫の名だ。因果応報とでも言うべきか、二人のヒロインは揃ってその不実な素顔に見合いの「品行の悪い」人物を配偶者としている。ここで注目すべきは「ジュディのみが大人しく家の中へと引き下がり、事が推移してゆくうちに容色を失ってしまった」ことだろう。ジュディへの想いを断ち切るべく大戦の渦中に身を投じることで、デクスターが彼女を巡り嘘を吐くことを放棄したことは先に述べた。その当然の帰結として、彼女の虚像は雲散霧消してしまうのである。仕事で面会した人物から偶然ジュディの近況を聞かされることで、デクスターは伝聞の形ではあるものの、七年振りに彼女と再会を果たすことになる。その人物はデクスターに対し次の様にジュディの近況を伝える。

“... I can't understand how a man like Lud Simms could fall madly in love with her, but he did.... Lots of women faded just like that.... You must have seen it happen. Perhaps I've forgotten how pretty she was at her wedding. I've seen her so much since then, you see. She has nice eyes.” (“Winter” 145)

七年の時を経て忽然と姿を現したジュディに、かつての面影はもはやない。数多の男性を虜にした魅力はすっかり影を潜め、彼女は「黄金の妖婦」とは凡そ言い難い「大概の女性」の一人となり果てると、その変わり果てた実像を晒すばかりだ。

一方デイジーにおいては、その虚像がギャツビーの非業の死を滋養とするが如く更に成育し、作品の末尾に至って圧倒的な高みへと昇り詰めてゆくことに我々は驚きを禁じ得ない。ニックはそれを次の様に伝える。

And as the moon rose higher the inessential houses began to melt away until gradually I became aware of the old island here that flowered once for Dutch sailors' eyes—a fresh, green breast of the new world. Its vanished trees, the trees that had made way for Gatsby's house, had once pandered in whispers to the last and greatest of all human dreams; for a transitory enchanted moment man must have held his breath in the presence of this continent, compelled into an aesthetic contemplation he neither understood nor desired, face to face for the last time in history with something commensurate to his capacity for wonder.

And as I sat there, brooding on the old unknown world, I thought of Gatsby's wonder when he first picked out the green light at the end of Daisy's dock. (*Gatsby* 140-141)

ニックはここでギャツビーの吐いた嘘の具体像を、即ちギャツビーに生成されたデイジーの虚像を開示する。「オランダの船乗りたち」が「新世界の初々しい緑の胸」を目の当たりにし「美的瞑想に否応なく引き込まれ東の間息を呑んだ」と、「ギャツビーがデイジーの棧橋の突端に灯る緑色の灯を初めて見付けた時の彼の驚き」とをニックは等号で結ぶのだ。こうすることで、ジャズ・エイジのしがない闇酒屋の悲恋は時空を遥かに超え「人類最後の、そして最大の夢」の物語と化すと、我々を「古の神秘の世界」へといざなってゆく。そしてそこに我々は美しく結晶したギャツビーの嘘を見出すことになる。デイジーはその「不注意」で「腐り切った」実像を美しく飾り立てられると、「新世界の初々しい緑の胸」に抱かれ密やかに花開く一輪の可憐な「ひな菊」(daisy)と化していたのである¹。

II

ここで嘘吐きの系譜に名を連ねるもう一人の嘘吐き、「罪の赦し」の主人公の少年ルドルフに目を転じたい。「冬の夢」や『ギャツピー』とは異なりこの作品においては、主人公を魅了し翻弄する妖婦の如きヒロインは登場しない。だが冒頭でも触れた通り、「罪の赦し」は少年の嘘の是非を問うた作品であり、彼が会得する自らの嘘の本質の考察を経ることで、本論の目指す、主人公たちが吐く嘘の真意の解明への到達が一気に加速することになる。

ルドルフは自身を取り巻く卑小な現実から逃避すべく、日々空想の世界に遊んでいるような少年であり、それ故いつしか彼は「常習的そして本能的に嘘を吐く」(“Absolution” 163)ようになっていた。この年少の嘘の常習者は告解の場で、シュウォーツ神父 (Father Schwartz) に対し今まで一度も嘘を吐いたことがないと虚偽の告白をし、更にあることかそれを悔い改めることもなくそのまま翌日の聖餐式に臨んでしまう。こうしてルドルフは自ら信仰の危機を招くことになるが、そうした状況のうちにその嘘の本質が浮き彫りにされてゆく。彼は聖餐式直前の告解でまたしても嘘を吐いてしまうのだが、その直後の少年の有様は次の通りだ。

A maudlin exultation filled him. Not easily ever again would he be able to put an abstraction before the necessities of his ease and pride. An invisible line had been crossed.... Hitherto such phenomena as “crazy” ambitions and petty shames and fears had been but private reservations, unacknowledged before the throne of his official soul. Now he realized unconsciously that his private reservations were himself—and all the rest a garnished front and a conventional flag. (“Absolution” 167)

引用の「個人的な秘密」とはルドルフの「安楽や自尊心には不可欠なもの」、つまりは彼がこれまで吐いてきた嘘の堆積と言えよう。ここで少年は嘘こそが「自分自身」に他ならず、「その他のものはすべて上辺だけの飾りであり、便宜上の旗印に過ぎないと悟」るのだ。それは嘘から後ろめたさや罪の意識といった否定的側面を取り払い、そこにある種の優位性を付与することに他ならない。こうしてルドルフは「目に見えぬ一線を越え」と、

嘘の常習者なればこそ「涙がこぼれそうなくらいの高揚感」を覚えるのである。

それでは一体何故、嘘から否定的側面が拭い去られそこに優位性が付与されるのか。作品のクライマックスとでも言うべき「遊園地」を巡る少年と神父のやり取りの場が幕を開けると、その理由が明かされることになる。

“Look here—” He came nearer to Rudolph, but the boy drew away, so Father Schwartz went back and sat down in his chair, his eye dried out and hot. “Did you ever see an amusement park?”

“No, Father.”

“Well, go and see an amusement park.” The priest waved his hand vaguely. “It’s a thing like a fair, only much more glittering. Go to one at night and stand a little way off from it in a dark place—under dark trees. You’ll see a big wheel made of lights turning in the air, and a long slide shooting boats down into the water. A band playing somewhere, and a smell of peanuts—and everything will twinkle. But it won’t remind you of anything, you see. It will all just hang out there in the night like a coloured balloon—like a big yellow lantern on a pole.”

Father Schwartz frowned as he suddenly thought of something.

“But don’t get up close.” he warned Rudolph, “because if you do you’ll only feel the heat and the sweat and the life.” (“Absolution” 170-171)

引用にある通りシュウォーツは要領を得ぬことを口にし、少年のみならず我々読者をも大いに困惑させるが、アーヴィング・マリン (Irving Malin) はこの場面の神父について言及し、「彼は現世に対する自身の怯えを告白している」(Malin 215)と指摘する。マリンの見解を援用すれば、シュウォーツが少年に対して「遊園地」への接近を戒めるのは、それが彼の「怯え」る「現世」を象徴するからだ。引用の「遊園地」に「熱と汗と生气」が付着しているのはそのためであろう。シュウォーツは「現世」、つまりは現実に近づいてはならぬと論しているのだ。彼は現実を決して受容せぬよう、絶えずそれと「距離を置く」ようにと少年を手引きしているのであ

る。ここで留意すべきは、一見したところ狂人とも受け止められかねないシュウォーツが聖職者であるということだろう。ルドルフが嘘の常習者であることは既に述べた。そんな少年の目には、嘘という虚構の対極にある現実を忌み嫌いそれを脇へと押し遣るよう鬼気迫る趣で諭すシュウォーツは、嘘の存続に自らの命を捧げる殉教者の如く映っていたに違いない。そんなシュウォーツに教え導かれ、ルドルフは遂にその嘘の本質を会得することになる。

He sat there, half terrified, his beautiful eyes open wide and staring at Father Schwartz. But underneath his terror he felt that his own inner convictions were confirmed. There was something ineffably gorgeous somewhere that had nothing to do with God. He no longer thought that God was angry at him about the original lie, because He must have understood that Rudolph had done it to make things finer in the confessional, brightening up the dinginess of his admissions by saying a thing radiant and proud. (“Absolution” 171)

ルドルフは告解における「告白の薄汚さを美化」しようとしたことに対して、つまりは醜悪な現実を美しく飾り立てるべく嘘を吐いたことに対して、神が「怒っている」どころか「理解してい」と「確信」する。それは即ち神による「原罪的な嘘」の容認に他ならぬ。ここにルドルフの会得した嘘の本質が見て取れよう。それは神の御眼鏡に適うよう醜悪な現実を美しく飾り立て、「きらきらと輝く誇らしげ」なものへと変容させた聖なるものであったのだ。故に嘘はそこから否定的な側面が一切拭い去られると、絶対的な優位性を帯びるのである。

ギャツビーもまたこの嘘の聖なる本質をルドルフと共有している。ニックはそれを直截且つ詳細に、そして詩的に我々に伝えている。

His parents were shiftless and unsuccessful farm people—his imagination had never really accepted them as his parents at all. The truth was that Jay Gatsby of West Egg, Long Island, sprang from his Platonic conception of himself. He was a son of God—a phrase which, if it means anything, means just that—and he must be about His Father’s Business,

the service of a vast, vulgar and meretricious beauty. So he invented just the sort of Jay Gatsby that a seventeen year old boy would be likely to invent, and to this conception he was faithful to the end.... Each night he added to the pattern of his fancies until drowsiness closed down upon some vivid scene with an oblivious embrace. For a while these reveries provided an outlet for his imagination; they were a satisfactory hint of the unreality of reality, a promise that the rock of the world was founded securely on a fairy's wing. (*Gatsby* 76-77)

少年時代のギャツビー、即ちジェイムズ・ギャッツ (James Gatz) は十七歳の時にジェイ・ギャツビーなる分身を生み出し貧しい出自という卑小な現実を否定すると²、以来、その人生全てを偽ってゆく。つまり彼は「現実の非現実性」を盲信して人生の捏造という途方もない嘘を吐き続けてきたのだ。そしてギャツビーが「巨大且つ通俗的であればばしい美への奉仕」を、即ち「十七歳の少年がいかにも思い付きそうな」嘘を吐くことを、「父なる神の務め」と認識し「神の子」となり得ると、ここに主人公たちが吐く嘘の神聖化が極まるのである。

だが決して忘れてはならぬのは、「現実の非現実性」を信じ醜悪な現実を美しく飾り立てるこの「父なる神の務め」なるものが、苛烈を極めることだろう。シュウオーツ神父は、ルドルフに一種異様な訓戒を垂れこの嘘の聖なる本質へと少年を導くとその場で卒倒し、不気味な「反響言語」(“Absolution” 171)を辺りにまき散らしながら狂気の淵に沈むことを強いられる。我々はそこに神父の精神的な死を感知せずにはおられまい。デクスターとギャツビーという二人の嘘吐きの消息は先述の通りだ。嘘を吐き続けたギャツビーは非業の死を迎えねばならず、それを断念したデクスターとは好対照をなしている。

この様にシュウオーツとギャツビーは精神的肉体的な違いこそあれ、共に死を甘受せねばならぬわけだが、ルドルフも同様と見るのが妥当であろう。マリムも少年の行く末を次の様に慮っている。

It is not surprising that as he matures, he perceives the horror of Father Schwartz's own vision. He cannot, therefore, remain calm and brave—he panics in the face of the priest's craziness—and he runs from the study; he does not recognize that he will have to live with

horror in a state of continual *non-absolution*. (Malin 215)

マリンは、ルドルフが「成長するにつれ、シュウォーツ神父自身の見解の恐ろしさを理解するようになる」と予言する。自らを導いた神父の「見解」を「理解」し共有するからこそ、本人は未だそれに気付かぬとも、少年もやがては神父と同様の「不断の非赦免の情況」に置かれることは必定であるとマリンは考察するのだ。この「不断の非赦免の情況」が、常軌を逸するが余りもはや正常への帰還の「赦免」が叶わぬ情況、つまり狂気の状態であることは言うまでもない。こうしてルドルフもまた狂気の奈落へと転がり落ち、精神的な死を甘受するであろう暗い予感が立ち籠めるとそれは、「父なる神の務め」に勤しむことが死を賭することにも等しい難行苦行であることの、更に言えばほぼ履行不可能なものであることの証左となるのである。

Ⅲ

「冬の夢」と『ギャツビー』ではヒロインの実像が醜悪であるが故に、主人公たちは美しく飾り立てたその虚像を生成すべく、彼女たちを巡り嘘を吐いた。「罪の赦し」ではルドルフがその嘘の聖なる本質を会得し、『ギャツビー』においてその一層の神聖化が図られると、嘘は「父なる神の務め」と見做され、嘘吐きの主人公には「神の子」の呼称が与えられた。更にこの「父なる神の務め」の履行が極めて難しいことも、ルドルフと彼を導いた神父、そしてギャツビーの消息から窺い知れた。以上のことから我々は、本論が目標に掲げる主人公たちの嘘の真意の解明に到達することになる。 「神の子」を自任する主人公たちが「現実の非現実性」を信奉し、成就が極めて難しい「父なる神の務め」という聖なる嘘に専心する有様はそのまま寸分違わず、かつてピューリタンが新大陸アメリカに降り立ったことに端を発するその後のアメリカの歩みと合致するのである。亀井俊介は黎明期以降のアメリカの歩みを次の様に述べている。

十七世紀はじめ、大きな危険をおかして大西洋を越え、新大陸に渡ったピューリタン（清教徒）たちは、よく言われる信仰の自由を確保することのほかに、具体的な目標をもっていた。彼らは、ヨーロッパのキリスト教は腐敗し、従って社会も墮落しており、希望はないと考えた。そし

てアメリカに、自分たちの信仰をピュアな形で実現する理想世界を建設しようと思ったのである。

このピューリタンにとって、アメリカの荒野は、ヨーロッパの社会の様に汚れていない、清い土地だった。彼らはアメリカを「新しいエデン」と呼んだ。……商業や産業が発達し、合理的な知識も進むにつれて、神よりも人間を中心とする考えが強まり、ピューリタンの信仰や制度は弱まるざるをえなかった。だがそれにもかかわらず、「新しいエデン」建設の試みは、形を変えながら、いつまでも続いた。

一七七六年、アメリカはイギリスの植民地であることを止めようとして「独立宣言」を發し、「すべての人は平等につくられている」ことを主張した。そして一七八六年に制定された「合衆国憲法」では、共和主義の制度を打ち立てた。これはともに、「新しいエデン」建設の意欲の、政治的なあらわれといつてよい。もちろん、どこの誰でも、この種の文書では法螺を吹く。アメリカでも奴隷制度や女性差別など、様々な嘘をかくしてきた。(亀井 13-15)

亀井の言葉を借りてこうしたアメリカの歩みを法螺話生成の集積と見做したとしたら、それは奇抜な空論と誹りを受けるだろうか。亀井は引用に続けて「しかしまた、多くのアメリカ人が理想的な新世界建設を『聖なる実験』と心得、実行につとめてきたことも事実なのである」(亀井 15)と指摘する。この「聖なる実験」とはアメリカという法螺話生成の試みに他ならず、その神聖化された呼称からも窺える通り、それが既述した「父なる神の務め」と同義であることに異論はなかりう。この「聖なる実験」が困難を極め、ご破算の憂き目を繰り返して見えてきたことは言うまでもない。その詳細については数多ある優れた論考に譲るとして³、入植当初より先住民に対する略奪や虐殺、搾取が横行し、独立後は奴隷問題の激化から国家を二分する未曾有の内乱である南北戦争を招いた上に、その後も黒人や移民に対する暗いレイシズムの台頭を許したアメリカの沿革は周知の通りだ。そんなアメリカにおいては、どんなに高邁な理想を掲げ「新しいエデン」建設に向け邁進しようとも、醜悪な現実はこの「聖なる実験」を容赦なく頓挫させ続けたに違いない。「聖なる実験」が履行困難な「父なる神の務め」の同義となる所以である。アメリカにおいては「現実の非現実性」を信奉しその醜さに抗い幾度それを美化しようとも、それは執拗且つ無慈悲に表

出を繰り返しては、深い徒労感で辺りを埋め尽くしたのである。「冬の夢」においてジュディの虚像の生成に精も根も尽き果てるデクスターの姿にこうした経緯が投影されていること、またそこに「罪の赦し」におけるシェウォーツ神父の現実に対する怯えも起因していることは、改めて指摘するまでもなからう。

フィッツジェラルド作品の主人公たちが吐いていたのは、色恋沙汰に纏わる個人的で些細な嘘などでは決してない。それは夢や理想、大志や野望を巡るアメリカという壮大な嘘の隠喩だったのだ。ギャツビーの嘘が「古の神秘の世界」で美しく結晶し、そこにアメリカ黎明期の趣が添えられていたのは、それを示唆せんとする作者の意匠の顕れだったのである。

結び

「冬の夢」においてジュディに翻弄され深い徒労感に苛まれたデクスターは、「父なる神の務め」の放棄と引き換えに、上辺の安穩を確かに手に入れた。だがそれでも彼は耐え難い苦悩を味わわねばならない。既に述べた通り「父なる神の務め」からの解放と引き換えにジュディの虚像は消え失せ、それと入れ替わりにその醜悪な実像が表出すると、デクスターは終始それと向き合うことを強いられることになるからだ。こうした見かけの安穩のうちにデクスターが耐え忍ぶ苦悩を、フィッツジェラルドは「強者のみにあてがわれる深き苦悩」(“Winter” 143)と呼んでいる。「父なる神の務め」という難行苦行を放棄したその代償としてデクスターは、虚しく潰えた夢と理想の残滓が散乱する、茫漠たる光景を直視し続けねばならぬのだ。

The gates were closed, the sun was gone down, and there was no beauty but the grey beauty of steel that withstands all time. Even the greif he could have borne was left behind in the country of illusion, of youth, of the richness of life, where his winter dreams had flourished. (“Winter” 145)

「父なる神の務め」に勤しむ者は確かに苛烈な経験を余儀なくされた。そしてそれを放棄した者もまた、安直な希望への「門は閉ざされ」と、冷たく堅牢な「鉛色の鋼の美」という牢獄に繋がれ、喪失感と失意そして徒

労感が緋い交ぜになった苦渋を嘗め続けねばならない。だからこそ、それに耐え忍ぶ者は「強者」であらねばならぬのであろう。

この「深き苦悩」を甘受するのはデクスター一人だけではあるまい。数多のアメリカの民もまた、幾重にも積み重なる潰えた夢と理想の残滓を直視させられ続けたのであり、それ故にこの「深き苦悩」とは連綿と引き継がれてきたアメリカの苦悩に他ならぬのである。

註

- 1 Lehan (65) 参照。
- 2 「罪の赦し」ではルドルフもまたブラッチフォード・サーネミントン (Bratchford Sarnemington) なる分身を生成し、自身の貧しい両親を否定しているが (“Absolution” 162-163)、それは『ギャツビー』においてジェイムズ・ギャツ少年がジェイ・ギャツビーという分身を生み出し自らの出自を否定したのと全く同様である。
- 3 数多くの優れた論考があるが、ここではその一つとしてアーサー・M・シュレシンジャー, Jr. (Arthur M. Sckesinger, Jr.) の『アメリカ史のサイクル』(*The Cycles of American Hiostory* 1986) を挙げておく。

引用文献

- Bryer, Jackson R., ed. *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: New Approaches in Criticism*. Madison: U of Wisconsin P, 1982.
- Fitzgerald, F. Scott. “Absolution” and “Winter Dreams.” In *The Stories of F. Scott Fitzgerald: A Selection of 28 Stories*. Ed. Malcom Cowley. New York: Charles Scribner’s Sons, 1951.
- , *The Great Gatsby*. Ed. Matthew J. Bruccoli. Cambridge: Cambridge UP, 1991.
- Kuehl, John. *F. Scott Fitzgerald: A Study of Short Fiction*. Boston: Twayne, 1991.
- Lehan, Richard. *The Great Gatsby: The Limits of Wonder*. Boston: Twayne, 1990.
- Malin, Irving. “‘Absolution’: Absolving Lies.” In *The Short Stories of F. Scott*

「強者のみにあてがわれる深き苦悩」—フィッツジェラルド作品における三人の嘘吐きとその嘘を巡って— 19

Fitzgerald: New Approaches in Criticism, 209-21.

Schlesinger, Jr., Arthur M. *The Cycles of American History*. Boston · New York: Mariner Books, 1999

亀井俊介 『ハックルベリー・フィンは、いま—アメリカ文化の夢—』
講談社, 講談社学術文庫, 1991

